

「夢を運べ、北の島から日本の空へ」

— 絶滅から復活への道を歩むシジュウカラガン —

講師： ^{くれち} ^{まさゆき} 呉地 正行
日本雁を保護する会 会長



パタ崎さんと一緒に

黒い首と白い頬を持ち、首の付け根の白い首輪と、四角い頭が特徴のシジュウカラガンは、仲間のカナダガンに似るが、体がずっと小さく、体重は大型のカナダガンの 1/4 程度しかない。そのため、外敵が少ない千島やアリューシャンの安全な島々で営巣・繁殖していた。ところが、それがあだとなり、絶滅への道を歩むことになる。20 世紀初頭に、世界的な毛皮ブームが起き、当時日本領だった千島では日本政府が、またアリューシャンでは毛皮業者が、毛皮採取のために多くの島に次々にキツネを放した。当時中部千島だけでも 4,000-5,000 頭のキツネが放飼されていた。そのために、シジュウカラガンはそのえじきとなり、1938 年には繁殖地の島々では 1 羽も確認できなくなり、越冬地の日本でも 1935 年以降は、群れでの渡来が途絶えて、シジュウカラガンは地球上から永遠にその姿を消し、絶滅してしまったと考えられるようになった。

しかし、その 24 年後の 1962 年。奇跡が起きた。アリューシャンの小島、バルディール島で奇跡的に生き残っていたシジュウカラガンの小群を米国の研究者が発見した。米国政府は、一部の鳥を捕獲し飼育下で保護増殖するとともに、シジュウカラガンの羽数回復チームを作り、アリューシャンの群れの羽数回復計画に着手し、長い年月ををかけて成果を上げていった。その後日本でも日本雁を保護する会の横田義雄会長（当時）を中心に、その群れを呼びもどす運動が始まった。1980 年、札幌の国際シンポジウムで、横田会長らが米国政府の代表に直訴し、米国からの支援の約束を取り付けた。仙台市八木山動物公園には繁殖施設が完成し、そこに繁殖用の親鳥を米国から借り受け、飼育下での繁殖とこれらの鳥を用いた羽数回復が始まった。

当初は日本と繁殖地（ソ連；現ロシア）の間には、政治の壁があったため、越冬地で放鳥し、繁殖地へ渡らすことをめざす越冬地放鳥を行わざるを得なかったが、十分な成果が上らず壁に突き当たってしまった。ちょうどその頃、1989 年に、カムチャツカから来日した N. グラシモフが繁殖地での羽数回復事業に同意し、1991 年にはソ連邦が崩壊し、これまで障害となっていた政治の壁がなくなり、1995 年に繁殖地千島での放鳥が始まった。当初は成果がでなかったが、やがて家族群が渡来し始めると、その数は順調に増加し、2015/16 越冬には 3,000 羽を超え、絶滅から復活への道を歩み始めた。今後の課題は、国内外で、これらの復活した群れの保護・管理と、その生息地の保全・拡大、啓発普及活動が必要になる。特に繁殖地での調査は欠かせない。

講師プロフィール

1949 年、神奈川県生まれ。東北大学理学部物理学科卒業。日本雁を保護する会会長。
1981 年、日本鳥学会より鳥学研究賞。1994 年、日本鳥類保護連盟総裁賞。2001 年、「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰（保全活動部門）。宮城県栗原市若柳在住。



日時：平成 29 年 11 月 4 日（土） 14 時 30 分～ 16 時 00 分
場所：アビスタ（我孫子市生涯学習センター）ホール
主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所